



近世说美女年録

五編

四

~ 13
3567
24



門 13
號 3567
卷 24

新編玉石童子訓卷之五上册



東都 曲亭主人人口授編次

非常の根抵妙小奇瘡と美を

刑餘の細人送小機會小散馬く

却説末朱之次暗賢と枸杞村多孤屋の門小車と遺留めて只管小呼の程小
主人とかつた一個の莊客年齢五十年有餘也蚊拂團扇と多小持るがら應と
答ふ出て来り朱之次と左見右見て這癩蝦蟇か何のぞ暈昏小物々々人を呼
ぶるやあるもの内欲く始より乞ひて何等の野用あるやと叱る朱之次は否否
答ふ乞見非人小福富村より觀音寺入湯治の為小申者白れ身小悪瘡あ
る故小人敢て宿と貸さむ稍這里まで來ふける小前程の都て山路まで單車と遺
るくものた倦腰小此の盤纏あり願ふ御身体為小今宵より人を央て明日も早

玉石童子訓卷五上

早稲田 大學 図書館
昭和 34.6.3 購
藏 書

天小車と牽せり。観音寺へ送り母の。俺然と云は報と云ふ。此後を慮まらざる。
 と請ふと主人はちやて開かざる。當村の観音寺の御城の普請の夫
 役を徴れて社役毎一人も居らば。偶家小在る者。俺の。老人を。備ふ。者
 ある。開かば。頼む。と。辨ふ。朱之。父。母。然ら。其。人。の。か。り。来。る。も。唱
 ら。地。小。車。と。留。め。姑。且。將。息。せ。ま。く。欲。き。見。れ。前。面。小。屋。の。要。ま。り。唱。多。の。貸。て。四
 五。日。起。臥。と。饒。一。の。其。房。錢。の。化。と。ま。ら。貸。い。て。と。請。求。る。と。主。人。の。父。々。沈。吟。と。那
 異。唱。多。の。稻。置。小。屋。也。只。今。の。要。ま。り。れ。出。処。不。定。の。孤。旅。客。の。而。難。病。の。者。留
 る。と。做。ら。が。る。と。固。辭。は。朱。之。父。の。恨。一。家。其。顔。熟。々。ち。向。上。て。思。ひ。出。さ。る。玲。和
 主。は。是。之。池。邸。の。宿。六。使。の。あ。ら。せ。や。と。向。て。主。人。の。胆。を。淡。く。開。き。い。ふ。と。知。ら。れ。い
 抑。和。郎。何。人。の。身。と。問。復。さ。れ。然。れ。と。唱。多。八。九。年。前。の。比。も。母。親。と。共。侶。福。富
 許。富。居。る。末。松。珠。之。父。即。是。之。和。王。必。覚。の。一。今。の。姓。名。と。改。め。末。朱。之。父。時

賢と喚做て久く大和の。福富の。猶受合。の。餘波。の。故。を。乞
 ん。と。承。け。る。其。次。の。目。も。あ。の。瘡。出。來。て。身。難。美。做。し。和。主。の。宿。所。と。訪。り
 然。る。と。小。忠。二。が。貪。慾。の。處。與。ま。死。金。子。と。渡。し。せ。て。観。音。寺。へ。あ。て。湯。治。せ。よ
 と。車。の。載。て。追。出。た。ら。腹。の。立。も。身。の。甲。斐。を。示。稍。這。里。ま。と。あ。る。人。和。主。又。何
 の。故。に。池。邸。の。居。ら。せ。と。這。頭。の。轉。宅。と。あ。る。と。問。へ。宿。六。嘆。嘆。と。和。郎。面
 影。垂。り。か。の。名。告。ら。れ。知。る。と。現。在。の。聲。音。不。覺。の。原。來。珠。乃。餘。波。の。故。を。乞
 人の。落魄。の。知。ら。れ。ぬ。者。也。只。痛。ま。く。思。の。と。這。里。の。唱。多。の。宿。所。の。あ。ら。せ。合。者。留
 守。と。喚。做。し。者。支。婦。身。故。り。を。け。る。其。子。金。九。郎。の。支。役。を。徴。れ。て。家。と。守。者。を。た
 故。小。只。得。唱。多。の。留。守。を。見。向。加。加。之。池。の。宿。所。在。の。昔。馴。熟。の。和。郎。を。非。如
 難。病。を。い。と。空。小。屋。を。ろ。の。貸。せ。ん。観。音。寺。の。温。泉。を。藥。湯。風。爐。の。あ。る
 と。然。る。難。病。の。愈。え。り。と。の。噂。と。す。と。あ。ら。せ。今。世。一。瘡。の。那。皇。を。た。と。名。を

醫師小療治と云ふことよかれ其折まの那里ぞ徐に将息まの心と懇切に慰め
 軀て車を推遣りて件の空屋へ資入れて菰苳二枚と布儲るとも朱之介の臥簾の
 を其後大なる握飯三四箇と煎茶の上瓶執添てのりて夕餉を取られ朱之介
 且感且歎ひ不堪ごとく憤鼻禪に結着る金一分と揚生も是を宿六に贈りて
 其美及人並る取和郎の難病療治の多し錢は使へし瘡て後ふて謝物と云ふ
 受も其今に要すくと辭めて歩むた朱之介の一錢を費さざりて二度の飯の僅小安
 身の所と云ふ八月の時候まで這里に在り約莫の一村の枸杞最なる地方に甘又葉
 とも又生じて其の多し隨小家毎是をとり生牆に做さるる或は田園の畔るよ
 あの物更にを共合して薪のたれども盡されば人喚做して枸杞村といふ枸杞の葉是神
 藥を顔色も増髪髪を黒く歯固く精と杜の葉は是補益良劑也脾

胃と調痰血と和け毒瘡と治し雨濕と拂ふ他の效驗技本小違ふを云ふれども
 此の地の愚民多し是を知る者あるは徒ら敷を敷て其とも盡ると思ふ然れ秋八
 九月に至る毎に其實絳糸赤微有敷糸の長短見るはわれと枝刺れは折者多し
 況食料小做さふ當らむと春毎に其藟葉と摘採て蒸て煎茶に代る者ありこの故
 本村の莊客は長壽七八十に至る者あり其経験と知らむ世に千里の馬をたぬ
 ねど李伯樂のあらわれ誰欲く是を知るはと改圃の糞其の良藥も是に似る
 あり只知らざるを怨とて同話題休介程小朱之介の盆九郎の空小屋小單起臥去
 程小秋も八月の中旬よりて夾衣欲る時候れを件の小屋の邊中の一葉の枸杞
 藪のり又左右三百歩枸杞の生牆ありは長脚蚊のいも亡むして昼も身不寄るを
 拂ふの夜に漸く枕小取れく虫の聲より外に友多衣元布く霜の置れと折ら十五
 夜の月隈る齊て茂林と西る鴉の聲を罪多くて配所の月見き欲とのけん

昔の歌人の風流史。似るるもあらざるの賢と云く不肖と云く人静る時を萬慮
 祛て妄想を動くより欲情起る事と知りて做さざるを慾と禁めぬれば
 壁言ふ朱之人の如き者も難病既小身小通り只其平愈と祈るの外を思慮と費
 せしむる事知又今宵は特小天霽月明小を睡んとする小宿も寝れ吉得清光の
 下小坐きて單更闌るま在り浩處小最小の面箇の獸忽然と出て来て朱之
 身邊小在り朱之人は是を見て田鼠をえと思ひいかかき拍鳴らして是を逐ふ走之
 枸杞藪の内へ入る姑且くと又出て来て朱之人の月を燭ふ其小獸と現見る小鼠
 亦申るまを。形状狗兒小肖るるか深く心小訝りて奇に獸をかく生拘て人小
 賣らば錢小做ると云らるま。と尋思と云く傍る竹笠とを引きて猶近づくを
 俟程小又只件の小獸の敢人を怖ると云く又朱之人の膝の邊へ連立て來ぬ
 時待儲る朱之人のまを準備の竹笠と阿呀と叫びて掩へ獸の逃る暇

多。二頭をらば立布れて透を求めてまを。當下朱之人思中。這奴些下傷む
 捉逃むるもあらん要とをあれと車の推木と撥合らば笠の上より漏れ曲る突か
 箇の獸の弱りゆへ寂と云く音をり作りぬ今も此比まを。とををらばまを拾ひて見
 果して奇を面箇の獸の死して笠の下小在り生拘多思ひ小突入ればまを。とを
 身と傷るる至らざり小脆に奴ると咳れてををら合抗て又よく見る小頭より尾小
 至る長僅小四五寸小過む形状の狗兒小似れま。真の獸小あらむして正是木此
 根中彫る如くかのつら。狗状と做せる造化の精妙涯り。這天工小又驚焉。朱
 之人の呆果て左は右也思へま。素是は何もの物まを。知らむ其形の奇なる
 今も顔郁と云く香氣あり咬る。餓を凌ぎま。のやあらんと思ふを夜に丑三の時
 候小多。既小物欲しく作り。試ふ其一箇の獸の前脚を嚼見る小本根ま
 とも余を壊る味甘くま。固かむ。敢まを。放らま。憶む其一箇を送る

く喫盡き立地飽満多し心地清爽の做りけり送る一箇の人も見せず後々
 までの話柄不做事なきと思ひて開く儘飯考老の内小斂めて是を枕にまけり
 有佳り程朱之が全身の毒瘡より猛可水膿の流るる雨の樹杪小伏が
 如く石滴の山より溜るる朱之の驚きたる拭をりて是を拭ふ單衣三絞る
 可小身の濡るると一時有餘其曉天小水濃の流もせむ做り一身も隨て軽く覺て
 且睡眠堪れ單衣の乾くと俵を赤裸せ車蒲團と被て熟睡するに
 俵而其次の日の宿六の例の如く炊て朝飯と喫果て野田をきて来て朱之の
 いま覺む他難治の病人多し尙宿没るとあらば及て村の危會せ俺錢の
 没りもあらず呼覚まばと思ひて握措る朝飯不園味噌煎茶と合添て空小屋
 りておる轉らぬ蒲戸推開てや珠刀袵起の日の高くと三四丈已牌の既小過る
 やよ起ぬと呼覚ま朱之の心と谷て被り蒲團を搔遣り赤裸せ起ぬと

目れが又怪む他が全身透間もけけけけ毒瘡の一夜の間餘波るる皆
 悉愈果て瘡痂も遺者も面部總身潔白く全身美しく做りて宿
 六の胆と潰して是は什麼とむる即今見る所をりて夏云と朱之の心と見
 故と詠れ朱之の亦敬馬てみづるを見し脚を見し頭と顔を拍て見て其
 瘡を瘡り果を知らぬ飲し不堪され既小乾き單衣と搔合り是を被て遠く
 帯と結いて謝して宿六の合る者小父よ俺瘡の愈る一箇様々の事ありと
 昨宵雨箇の奇獸と捉ゆる首より折る物欲くる隨其一箇を喫いば猛
 可小瘡より水出拭ふ違ふより其後睡眠を催して今も熟睡あけ尾
 毛を説盡しと又いふ件の獸の最小さる狗見ふ似て真物おらぬ實は木根の
 天然と其形状と做せんと老るる人疑て虚談をせせられと思ひければ其
 一箇を留めると則這果在の足見ると飯考老と開て件の奇木根と合て

開が儘指示其宿六も夢の毎小感嘆の聲と絶む件の本根と左見右見て且
 欽びて談きやう此は是豫言く拘神と歎喚做る神薬小をある人まの世
 が良劑る小和郎不用意小是毒瘡立地小愈ける年来信する神佛の
 利益小のあまうん就て一條の語説あり近曾觀音寺の城下小五足齋延明子
 と喚做一。一個の醫師あり開いぬ比俺弟留守七夫婦の大病の折久去く瘡
 治と乞いかば咱も粗回善多。まは小那五足齋一個の女兒あり其名を晚
 稻と喚れて今茲十六七歳多。儔稀き美女氣觀音寺の城内之第
 一の權臣多賀某甲殿不恋れて既小談ありける無斬之件の小娘は回
 瘡猛可小那身小出来て花の顔忽地の羅刹の如く做りぬ一かば二親痛く意
 にて素より家業あるれ。和漢の薬種價と惜ま前藥膏藥のやと煉薬
 藥風呂療治小とく樹を盡せとも竟小效驗あるれば五足齋嗟嘆多

俺療治今いあも盡る小似れとも猶一箇の奇薬あり拘神と用る小ありされ即
 效と記さるべ。述異記ありて人參千歳多時其精化して小兒小做りて夜去て
 藥園小遊ぶるあり拘杞も亦千年多時其根化して狗兒小做りて夜去て遊ぶ人
 參小相同し所云拘神即是之の載て本草中あり然りければ古く和漢に
 名醫是と記す用ひ者極て稀況今京浪速の薬舗ありあるべもあは但
 拘杞村の昔も拘杞最まるる地方れ其地の莊客是を採て藏措者あるべは
 是も亦知さるべ。非如然る者ありとも多る拘杞の根と穿て形狀狗兒小似た
 るあは俺百金とて是を買ん言々如律令と書寫して當村の衆人小就て未
 びると言へれば然深に毎各家の四下る牆ともいふ數ともいふ皆拘杞の根
 穿啓て狗兒小似ると採まされとも素よりあるべは物なるを勞く功るたのま
 果へ胡慮するのべ。あは七月のふあ然る久し話あり然るを和郎も



朱之次



神犬の乳



毒瘡一皮小平愈ま
綺薬の即效朱之次

宿六

濡きて拘神兩箇を斬く獲其一箇として身の毒瘡が即効あり十二分の好造化
 と云残る一箇を金百兩賣ら冥加餘りある一大奇事ありと云と自界表蟻め
 くと説諭せ満面笑る朱之次は听け憶を雀躍して又奇之妙なるを知王風
 く媒外きて這奇貨を百兩賣りて其金子を受合ら俺其折報せん徒然
 あり骨折ぬと憑ぬ宿六點頭て開けらるる。さうえぬ俺は拘神を携り吾足
 大人許赴て見せて機が不入るる其折和郎とわいて免既身の瘡愈る哉
 まゆ後這里あり死卒母屋来て留守ある善いを。と云夕あり一刻にも早
 がよんと云朱之次再議お及事。お係下。と云件の拘神と飯糰は老お容は
 儘お宿六と逸興と俱お母屋造れ宿六持かり握飯と煎茶の土瓶と
 地炕の湯使お浴して遠く葛籠より洗晒して粘剛る。單衣と麻の外套を出
 ちる。蠶く被更り帯引結て拘神の考老を懐楚と夾ち又朱之次お向ひ

お茶の哥。握飯お飽ら飯櫃は這里あり。又茶を煮て多装おあぬと
 じつ。脚半草履引穿て立ち時。菅笠を撥合ら戴て観音寺前投て
 いそげり。介程お朱之次。早飯を喫るごも。單宿六の久を俟。昨宵の曉
 天ま。お睡らざりけれ。詞敵もる宿お單徒然堪され横臥し。嗜睡てあ
 日未牌過る。比稍覺て起。又晝飯を喫果し。ごせ程。宿六から来たけれ。朱
 之次お出向へ。小父よ。さ熱多り。け那里の首尾の甚麼を。と問へ宿六好首尾好
 首尾開の。縁や。話去。朝夕の冷や。れ。頃昔の秋日和。夜。昼の。見。中。小異
 らら。八朝の。暗衣を。絞る。心。り。濡。たり。おの。汗。を。先。晒。乾。て。あ。そ。と。い。ひ。帯。と
 鮮捨て。單刺子。小脱更る。も。遠。處。を。法。團。扇。扇。で。果。を。茶。碗。に。漬
 茶。汲。合。の。一。呼。吸。お。飲。て。開。が。儘。高。胡。坐。却。朱。之。次。お。向。ひ。て。の。ち。哥。ら。先
 听。の。唯。高。の。觀。音。寺。る。五。言。足。大。人。許。赴。て。面。談。と。請。真。者。の。折。と

大人うい在宿まゐ即出すま対面たいめんの癖くせの来意らいいと問とかばおれ咄はな咄はな杓神しやくじんの一いち美みを告つぐ。ああとと俺家おれがの寓居うきの旅客りやく朱之しゆ之のと喚よ做しまま壯さう校がうが不用ふよう意いふふとと兩りゆう箇くわん籬しるる其その一いち箇くわん之の以もつ以もつ籬しるると和郎わらうが毒どく瘡そう難なん美みの又また其その杓神しやくじん一いち箇くわんを喫くて一夜いちやの間の毒どく瘡そうの餘波あまもああとと愈いええとと言い詳しやうの説せつ示ししてして曩な小我村せうがむら中ちゆうへ寄よさせせぬぬ言い文ぶんの違ちがふふとと價あ百金ひゃくきんを賜たまははれれ朱之しゆ之の小賣人せうばいじんとと先齋せんさいとと飯い箸しやく箸しやくとと用もちてて杓神しやくじんを指させせばば吾足齋ごそくさいの事こと毎まい感かん悦えつ特とく浅あくくとと手てをを杓神しやくじんとと合あ抗かてて左見さみ右見みぎみるる半响はんきやう許ゆる合あ矢やとと額ひをを拍たてて俺おれ徴ちゆうるる是こ是こ是こ遮さ莫ま世せの稀う者げ者げるる俺おれもも見みるるとと言いままららとと然しかるるとと目め前まへ這こ杓神しやくじんの真偽まへををいいまま定さだめめががらら先ま俺おれ女に兒ご小足せうそくを用もちひひるる百瘡ひゃくそう即効きやくあるるらら這こ價あ金百兩きんひゃうりゆうの明日あした必かな遞た與まとと言い相違あるる照あ据きの先まへやや實じつを取とせせむむとと航やうてて親筆しんぴつとと漆してて其その一通いつつうを書か寫かしし印いんを是こを渡わたす

ととかか咄はな咄はな則すな受合うけあてて明日あしたと契ちぎりり退まるる時とき吾足齋ごそくさい又また宣のたまふふ明日あしたとと又またとと早天さうてんよりより何なにもも世よの効験きうけんいいまま詳しやうららとと事こと不ふ便べんのの未牌みはいのの時とき候ありり其その人ひととと共とも侶りゆうのの在宿まゐてて俟まちたたららとと又またとと吾足ごそく大人おとなの奥おくのの御目ごめのの批ひららぬぬとと又またとと夙すく足そく好こう首尾しゆびのの説せつ誇こりりのの實じつをを合あ出だてて渡わたせせ朱しゆ之の受う合あてて合あてて前まへ見みるる其その書しよ小道せうだう可か買か取と取と藥種やくしゆの事こと杓神しやくじん一枚まい價あ直金ちきん百兩ひゃうりゆう也なり右みぎ於こ即効きやく有あ之の者もの明あ十七日じちちにち金子きんこ無な遲ち滯ちゆう可か渡わた之の候あ後照ごしやう實じつ仍なり如件ごと享祿きやうりよく三年さんねん八月はつげつ十六日じゅうろくにち吾足齋ごそくさい延明印えんめいいん旅人りょじん朱之しゆ之の父ちち保人ほにん宿六丈しゆくろくぢゆうとありあり朱之しゆ之の父ちち會あ笑わらてて是こははああれれ百兩ひゃうりゆうの明日あした未後みごのの受取うけとりり知しれれとありありとと這こ前まへ祝いわ小醉せうすいを盡じんまでまで寐ねてて待まち人ひと有あ志しるる果報くわんぱうと徒た法ぽう茶ちや噉たんりり居いるるとありありとと先件せんけんのの實じつをを宣のたまふふとと斂ありりてて懷なもも金一分きんいっぴんを撥は拂はりりてて宿六丈しゆくろくぢゆう遞た與ま

ちていふやう。小父是どりて好酒二斤と何れ殺し買ひて来ふ生魁は這頭なる。
 源五郎鯉魚瀬田蜆豆腐肉初茸もよかる錢を惜とてあるてよと又ハ
 宿六ちち笑ひてまご那金子もよか合も一分御金早からせや俺と程の
 志ん。そくとひらも緒付の龍引提て市と投てもおけ。余程朱之儀ハ宿六が
 かの来ぬと候と約莫半响許下晡お作りし時候宿六も思ひの隨酒と酒
 菜と買合ひて。左右引提てかひる鐘と龍を階櫃の頭おさし閣。是を朱
 之儀お目せくは。朝市も自由なれも夕市も然る物なり。和郎の機中
 入るまづこれ。是でも五給費し。とひら残る銀と錢を合せて還せし朱之
 儀ハおぼも端を推戻して然るの錢何せし開ち又明日の飲料ハ小父預と
 別當せよといひ提籠引よせ見。噫無斬心や火鯉五串泥鰌一籠酒の
 ちる酒一拜豆腐いあれも初茸。是で五百ハ高間の原お留まるのハ八十

萬の神々御酒を献せむとも夾般のる代ハ鮮味増撮て汁小父小父
 先窓を焼もやと我ら口の使。客と主と二人を扱料理の両三種迷ハ
 骨と折曆子の茶碗酒を間設ら。風くも鐘を盡し。現ハ張樂ハ當喫ハ
 物見の松と杉着と列衣て養齒ハ使ハ強飲敵ハ癖をば。隨ハ戲
 言と諷返し。自負傲慢音竟ハ俱ハ醉臥て日の暮るも知らる。徳而其
 次の日未之儀ハ日屬膿ハ塗れる。單衣を洗ると乾くを候。是と着て市ハ
 出浴。髪を結せ。かひる。秋の日最大短くて既ハ未牌の時候お作り
 けり。時分ハよくと宿六をのそがらうち連立て。吾足齋許赴くハ宿六ハ異議ハ
 及。今日事成らハ百兩の十分ハ俵物ハ。障ハ。金子受合せ。一
 本錢の福分さ。と肚裏ハ思ハ俱ハ歩も找。又。観音寺ハ東ハ。ハ
 之ハ。開ガ儘ハ那宿所の門ハ立せ。宿六ハ先裏面ハ入。ハ。聲高ハ。ハ。

程小奥の方を心と答て五石足齋出て宿六を見て笑はけり。日早の途を
折入先遠方へと請登まれば宿六も唯々となり。躬々玄関のち丹りて吾足齋
と面談を當下朱之次郎の那聲をうりて是必屋主人吾足齋をうと猜と
外面も爾窺るる物色も安定するねども年輪の正は是四十有餘也。總髪を身ゆる
仁田山細と縹緋の深做る單衣を被て聖柄る短刀を佩る。當下宿六も吾
足齋ふらち向ひて昨日見せまらむを。拘神の即効ひり。伏御約束の活主と相
俱へ伺ひまらむの心と公を吾足齋の果を然ればと其の氣昨日和主がなると躬て
咱等拘神を製劑を拙女晚稻の服用を味最宜とて時を程さす。其一
劑を嘗嘗盡したるれば心地清爽の作りぬる。佳而其睡昏より晚稻の面
瘡の腫増て薄膿の流るる。涌成を泉の異なるる。そそを拭ふ。違も。約莫
一時許りく膿竭て地腫減し病人の快は。躬て睡小就し。敢又敬馬を

母の枕方小是を護りて其覚るを俟程。今朝も巳の時候小至りて覚る
起る見れば晚稻が面瘡瘡り果て瘡痂も残る者。其容其病
さる時倍て美しく作り。六那身のら。俺們夫婦が飲ひ何更う。是の勝
然れば晚稻小浴させ髪結化粧の時程り。今身装と果し。有徳
と。那那談不憚り。俺情願も果さる。誠小拘神の即効小出れ。然れば
約束小違ふる。那代金を遞與まへ。活主朱之次郎とやら。咱等目今對
面見這意を傳へて伴ひ。久と久小宿六再議。及び。飲ひ養て答る。開ら
又愛さ。暎り。小泊。小姐様の面瘡御平愈と朱之次郎。毒瘡の平愈と其
の相似。現小神藥の效驗。争ひ。死者小。その金子。其他。賜り。ね。寶を
返。ま。あら。ま。けれ。と。ひ。躬て身と起。走。出。朱之次郎。小件。の首尾。と。叫。び。六
朱之次郎。天小飲。ひ。地小喜。び。て。點頭。の。餘談。小暇。を。折。り。引。れて。去。り。ぬ。る。を。見。ゆ。る。

来り宿六も云云と執合されば吾足齋の是へくと招くを朱之介の阿と云々
 不勝行頓首初見参の礼を倣さる大なるを僅小頭と拾げの幸う昨日の
 宿六の媒妁を御用不達一奇薬の即效仰示させぬ御飲ひと查すま
 つるぬきく價の百金と目今遞與へぬけりとと云ふ吾足齋うち寄て丹を勿
 論のゆえか。百術盡す俺世見晚稲の百瘡の一夜の間の愈て痕もあはれ倣
 する正和殿の賜之和殿の大和の人と秋少料らざる對面へ先近く找すぬ
 へ然るる以意さるとういとゆきて朱之介の辭ふらるる。あつらひ饒さぬひ孫と
 忘り膝と找めて頭と拾げて吾足齋うち向ふ時創て知る心の敬馬大抵そ
 忠憶をも聲を被て御身は是幸踏氏无四郎主ありまやとゆられて驚く吾足
 齋の暗を定め信と見て思ひみるや現小和郎の珠之介ありける。我の心大
 人備く童顔の耗れ見忘れしを鈍すれば汝の母の奥に在り風く逢へて後

せん。このひり聲をきき立ててぞ。花亭其里や居る珠之介が来るを以て對面
 あり。と西三番呼られ。阿夏の聲歎とむる小慌惑ひて知る來て朱之介を
 見つ宿六を見つ。こゝに胆を潰して。現小珠之介であるけり。思ふ倍て大言倣
 主の見を我の心も故あるありまか。宿六主と連立。訪来すも人の不思議の
 再會誰か。つて後珠之介とあて來て逢へぬ。御情を嬉しけれと謝され
 又宿六も承る。と半响許頭を撥り答る。否小可の這御宿所と然る方
 さはと思ひぬ。昨日拘神のゆふ就て推参まらり。折故弟留守七の噂の
 外の餘談する。今日珠刀餘をばせ来るのそ人共ゆくといひる。と云へ吾足齋點頭て
 然之和主の心も阿夏の聲とあれ。今忘れ思ひぬ。名を宿六と告られ
 ても其人との知らる。況大和の旅客身。拘神の活主朱之介と。名名の昨日より
 づれとも實の体乾児る。珠之介のありけるを神も。と誰歎悟ら入開其

該のありまや。とひつて呵々とうち笑へ。朱之次ハ母親阿夏と吾足齋のち向ひて
 別まのあり八九輪猶陸奥在まらんと思ひ。若と思ひたや。幾の比の於這郷
 へ根り来ちて今料らまも再會の本意と遂えといせ小稀るる幸るる大人の姓
 名俺名さへ今昔小同ドかられは迷ふ知らむ知るより多。酷く無礼をばり取と倍
 話ハ阿夏ハ恥る色あり朱之次ハ向ひて名を改め。主と汝と又只二人をま
 らる。俺身も亦故ありて近曾這里来り時より名を更めて老芋の刀自と喚做
 されゆりあるの餘會話ハ取不盡まづくもあを。宿六も共信ハ卒這方へ請
 找むれ。吾足齋も俱ハ。多くもありぬ若黨奴隷の前日猛可ハ故ありて身の
 暇を取らせり。折ら無僕ハ伯も。然せる数待ハ。心も。酒を
 薦を飲じと盡さる。卒先奥へと右ひどりも。誘ひ立て已され宿六を困ら。應
 應とる。朱之次と立せて俱ハ奥ハ入る儲の席ハ六疊可を布成る小室。

廊のり。朱之次ハ。朱之次と宿六も相復びて客坐不就ぬ。元四郎の吾足齋ハ打
 譚ふてあり。時程遠らぬ酒肆の小厮ハ所用と傳ふ。朱之次ハ阿夏の老芋ハ情
 中ハ酒般と吩咐ふ。そが立て遣る。女見晚稻ハ茶を若母で。親是と宿六
 と朱之次ハ。薦をとま。姑且と酒肆の小厮ハ酒一樽と酒菜幾種ハ引提の油
 桶ハ容る。井門口より来て来れば。老芋ハ是を受合て。錢を還して小厮を
 つ。晚稻ハ酒と。或ハ碗或ハ碟子ハ酒と茶と。酒盃と共
 侶ハ次第ハ客坐席ハ安排て。晚稻ハ酌と執る時。朱之次ハ告ぐ。俺は
 俺家の螟蛉女見。名を晚稻と喚做。陸奥在り。時主ハ親族の
 孤也。便着る。若者。羊七許る時より。養ひ取て。今も羊来ハ。珠之次ハ
 女弟ハ宿六も相識ハ。做ゆ。と正首ハ女見自慢の親心。執合まれば。朱之次
 宿六も。俱ハ目と奉て。晚稻と見る。面瘡病ハ。少女ハ似せ。世ハ稀。

離合時あり
小人僥倖と
ゆるり



多んぬ

あいそ



朱々々

あまね

宿六

下燻さるる最難百けれ。辭去ら。徑浪速小赴て十二屋小客店。這
 留あて在り。時人の為小誣えて思ひがけ多浪速る陣館へ召捕られて久き
 獄舎敷余れふ。亦冤屈の罪され。竟小俺身の厄解け。世間廣く做か。盤纏
 るけれ。福富る阿健小錢と借んと思ひて。單那里赴たけ。其次の日より身小瘡出
 来て打臥て在り。小忠二殘忍る錢と貸さ。罵る。果へ俺身と車小載て。逐出
 きて。端多。理喪勝も威勢中克う。辛く。杓杞村まで。居り。程小宿六雙小
 環會て。厄會小做り。杓神の即効惡瘡平愈。俺身安らる。創て。逢見を
 及。女弟。晚縮。面瘡瘡。果て思ひ。親連小今日再會。豫の情願。易からる。
 幸ある。口小信。巧言。現小。小人の癖。古の劍。莫邪。思あ。人
 恩と。甘言。誣る。小怨。以。惡事。秘。身。非。飾。其。誑。伴。時。取。て。實
 事。と。听。者。を。け。れ。吾。足。齋。晚。縮。一。宿。六。雙。小。感。激。を。嘆。嘆。小。堪。ぬ。開。が

中。小。阿。夏。の。老。母。へ。涙。啼。て。朱。之。小。向。ひ。て。思。ふ。増。る。汝。の。艱。難。二。石。と
 ぞ。小。父。公。小。環。會。け。今。夕。も。鉄。も。思。ふ。の。又。後。遂。き。何。と。果。敢。る
 小。別。母。を。れ。小。大。和。老。木。偶。小。主。の。前。妻。の。女。塔。小。做。り。其。家。の。女。兒。の。危
 難。と。救。ひ。思。美。小。二。結。れ。舊。縁。の。故。を。開。ち。切。り。の。家。の。女
 兒。の。身。故。り。と。汝。小。慘。劇。中。で。け。ん。落。葉。の。老。婦。の。腹。黒。さ。舊。怨。思。へ。や。悪
 妻。の。岳。母。の。機。嫌。と。然。し。も。取。難。て。辭。去。ら。浪。速。を。冤。屈。の。罪。の。縁。纏。か
 る。真。愛。身。小。枉。津。神。の。風。も。解。け。夏。の。霜。月。さ。雨。の。漏。宿。を。頼。小。堪。む。福。富。幸。く
 も。尋。ね。け。小。那。家。今。衰。へ。昔。の。如。く。も。小。忠。二。慳。貪。る。斗。善。熟。見。思
 ひ。せ。で。主。人。自。を。い。ふ。を。思。も。知。ら。我。も。知。ら。現。小。塵。の。世。塵。塚。小。在。と
 人。小。人。ら。一。人。の。怨。を。怨。る。れ。開。け。左。も。右。も。あ。れ。今。日。より。大。人。の。資。助。の。發。跡。を。是
 茲。居。て。時。と。俟。て。そ。と。め。れ。と。詞。雄。が。多。論。ま。の。只。己。子。の。虚。言。と。実。語。と。兼。て

身勝みかちも小耳こみみと貴たかむ婦女子つまこの愚癡ぐちと宿やど六むも慰難なぐさく喃阿なみ夏なつ様さま丹に理りの
 ゆるかゆるかかの咱おれも今いまの福富ふくとみ疎そけれ小忠こちゆう二に隻しゆうの心術こころづかひとくも知しるるなな大夫おほおと次つぎ大人おほおとの
 申まををを做して六む瀬せからぬぬもああべべ其頭そのかみも同おなくくかららも咱おれもも杓しやく杞き村むらも居い又また一向いっかう
 留守留守居いるる弟あとうの孩兒こころえの後見うしろみも阿あ加か々々の宿やど小こ在あり折をり觸ふて御身ごみの噂うわさを
 ととひひけるける日ひもも更さらりり小こ今いま日ひの團坐だんざとと知しららぬぬ然しかも美う美ま思おもひひはは單ひと咱おれもも不ふ兼かね
 ぬぬ怪あや金かね九く郎らうのの錢ぜにもも酒さけとと喫のもも親おやのの藥やく禮れいとと今いま果はたた大人おほおとのの脚あし無な沙さ汰た
 仕しららぬぬと陪ばい話わもも吾わが足あし齋さい推おし禁かへめめいいくく其その美み不ふ及およ不ふ及およ人ひと俺おれ始はじめもも珠たま之の小こ人ひと俺おれ素す
 生なまとと告つぐぐりり其その比ひ他たのの童どう年ねん史しののかかいいるるをを思おもへへ今いま昔むかしとと同おなくく又また他たのの人ひとをを説と
 示しささすすのの疑うたがひひ冰こ解げままるるをを宿やど六む隻しゆうのの舊ふる識し俱く小こ所ところととももけけるるななららぬぬとと
 ととららぬぬもも又また酒さけ盃さかずきとと遣や替かへへてて説と出でをを一ひと條ぢょうのの文ぶん書かけけられられるる畫えががらら開あけけ又また下した回まわりりをを

新局玉石童子訓卷之五上冊終



